広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	生成文法と第2言語としての英語の文法形態素の習得順序 : 概念とコメント
Author(s)	近松, 明彦
Citation	ニダバ , 24 : 21 - 29
Issue Date	1995-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00047952
Right	
Relation	

論　文

生成文法と第2言語としての英語の文法形態素の習得順序：概観とコメント

近　松　明　彦

0. 序

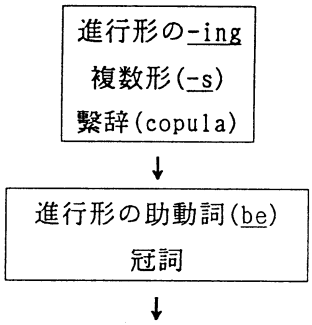
生成文法の主要な関心の一つが、言語獲得(language acquisition)のメカニズム解明にあることは言うまでもないことであろう。ことに初期の生成文法が、単にアメリカ構造主義言語学への反措定としてのみならず、行動主義学習理論への批判として登場してきたという側面があるということは見逃し得ない事であろう。このように、生成文法は、一面において言語習得論や言語教育論等とも深く関連している。生成文法がそれらの関連研究分野と連携して行くことは、望ましいことであろうと思われる。

本研究では、そのような生成文法と応用言語学的分野の橋渡し的な試みの一環として、英語文法形態素の習得順序という第2言語習得上のテーマについて、Krashen(1977)、Lightbown(1987)などの先行研究の概観とまとめに主眼を置き、これについて更に生成文法の立場から若干のコメントを試みたいと考える。

1. Krashen(1977)

第2言語習得の研究において盛んに研究されている英語文法形態素の習得順序については、様々な見解が存在するのであるが、一般に最も標準的であると考えられるのは、次に示すKrashen(1977)によるものである。それは、しばしば引用されている通り、概ね次のような形にまとめられる：

(1)　英語文法形態素の習得順序　(Krashen, 1977)：



不規則動詞過去形

↓

規則動詞過去形
3人称・単数・現在(-s)
所有格(-'s)

Krashen(1977)によると、英語を第2言語として学習する学習者は、上に示したような順序に従って、英語文法における形態法を習得するとされている。これは、意図的に上記のような順序に文法の教科書が編集されているということではなく、いわば一種の心理言語学的法則として、上のような順序付けが観察されるということである[1)]。

さて、本稿においては、ここで生成文法の観点から上の習得順序を改めて捉えてみることにしたい。

上のKrashenによる形態素習得順序は、言語学的観点から文法構造を考慮した場合、種類の異なる様々な要素が混ざり合う形で現れているという点が問題になるのではないかと思われる。具体的に言えば、進行形の"-ing"と進行形の助動詞"be"は一つの不連続形態素を形成するものと一般に理解されている。そして、生成文法では伝統的に、その接辞部分に当たる"-ing"が動詞の接辞位置に移動を行うと考えてきた（例えば、Freidin(1992:ch. 4)）。そのような不連続形態素を構成する2個の要素が異なる時期に習得されるということが何を意味するかという事を考える必要があろう。また、複数形("-s")のような名詞の末尾に生じる要素が、繋辞(copula)のような動詞的な要素と近い時期に習得され、その一方で、同じように名詞の末尾に生じる所有格標識"-'s"よりもはるかに早い時期に習得されている。このように、Krashen(1977)の順序においては、いくつかの系列の現象が混ざり合っているように見える。従って、これを整理し、そして、上のような関連した要素間の習得時期の相違を説明する事が望ましいと思われる。

ちなみに、大津(1994)、伊藤(1994)など、生成文法による第1言語獲得の立場からの指摘によると、第1言語の獲得におけるある時期に多数の言語現象が一挙に観察されるようになる場合があり、それら多数のの言語現象のうちのどれとどれが相関するかは判断が困難な場合があると言われている。上の形態素の習得順序の整理、解釈にもこれと類似した複雑さがあるのではないだろうか[2)]。

本稿では、上の問題点に対しての解決を示す段階には未だに至っていないのであるが、ともかくそのような問題があるという事は指摘しておきたい。

2. 生成文法における動詞移動

上で指摘した形態素習得順序の整理、解釈の作業は、かなり複雑な作業であるように思

われる。そこで手始めに、動詞の形態法にスポットを当て、生成文法におけるその扱いを確認しておくことにする。生成文法では、動詞の上向きの移動と接辞の下向きの移動を仮定している。これは、よく知られた標準的な考え方であり、筆者自身も他の所で頻繁に引用しており、重複する事になるが、重要な事柄であるので、ここでも簡単に概観しておくことにしよう。

一般に知られていることであるが、英語においては、次のように、頻度の副詞の位置が通常「主語－副詞－動詞」という語順の中に出て来る：

(2)They always go to Italy for their holidays.
＜彼らは休暇中いつもイタリアに行きます＞
(Longman Dictionary of Contemporary English)

一方、フランス語では、多くの場合、「主語－動詞－副詞」となるという[3]：

(3) Ils sortent peu souvent.
they go out little often
＜彼らは滅多に外出しない＞
(鈴木、中平、他(eds.), 1987)

生成文法では、「主語－Infl－（副詞（句））－動詞」といったように、主語と動詞の間の助動詞が現れる位置にInfl（ないしAGR-S）という範疇の存在を一般に仮定している（Inflは屈折を意味するinflectionに由来するものと思われる）。フランス語においては動詞がこのInflの箇所に動くため、結果として「主語－[$_{Infl}$**[動詞]**＋Infl]－（副詞（句））－ϕ」といった形になると考えられている。このプロセスを動詞移動(verb movement)と一般に呼んでいる。一方、英語では、逆に、Inflの位置にある接辞（屈折要素）が動詞の接辞位置に移動し、人称語尾として具現化すると考えられる。その結果、「主語－ϕ－（副詞（句））－[[動詞]＋**Infl**]」という形が得られるのである。この過程は接辞移動(affix hopping)と一般に呼ばれている[4]。

ここで、上の動詞移動・接辞移動の考え方に立って進行形の場合を見ておきたい。次のような例を取り上げてみよう：

(4)He's always causing trouble.
＜彼はいつも問題を起こしてばかりいる＞
(Longman Dictionary of Contemporary English)

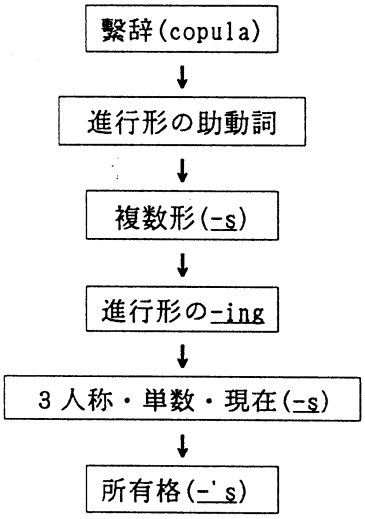
{BE-ING}という形のうち、BE動詞は主語と副詞の間に出ているのであるから、Infl の位置であり、"-ing"は動詞に接尾されている。つまり、BE動詞はフランス語の動詞のように Infl に繰り上げられる（線形的には左向きに動くように見える）。そして、"-ing"は英語の通常の接辞移動のパターンを示し、下向きに移動して動詞の語尾として実現する（線形的には右向きに移動するように見える）。このように、進行形は、"be"に関しては動詞移動を行い、"-ing"に関しては接辞移動を行うと考えられる[5]。

3. Lightbown(1987)

上の生成文法の理論から見て興味深いのは、Lightbown(1987)の研究である。先に見た Krashen(1977)の習得順序は、生成文法の観点から解釈することがかなり困難であるという印象を受けるが、それに対し、Lightbown(1987)が報告している習得順序は、前節で概観した生成文法における動詞組織の扱いから見て、かなり理解し易いのではないかとの印象を受ける。以下、Lightbown(1987)による形態素習得順序について見て行くことにたい。

第2言語としての英語の形態素習得順序として、Lightbown(1987)は、既に見たKrashen (1977)によるものとは異なって、次のような順序を提案している：

(5) Lightbown(1987)にる英語文法形態素の習得順序



ここで注目すべき事は、最初に習得されるのが、繋辞であり、それにつぐのが進行形の助動詞であるということである。繋辞も進行形助動詞もいずれもBE動詞であるから、つまり、BE動詞が最初に学ばれるということになる。尚、BE動詞は、英語の動詞としては例外的に**Inflの位置**に観察されるものと考えられるのであった（Pollock(1989), Chomsky (1993)等参照）。故に、フランス語の動詞一般と同様に動詞移動を行う要素（英語のBE動

詞）が最初に学ばれるのだということになる。

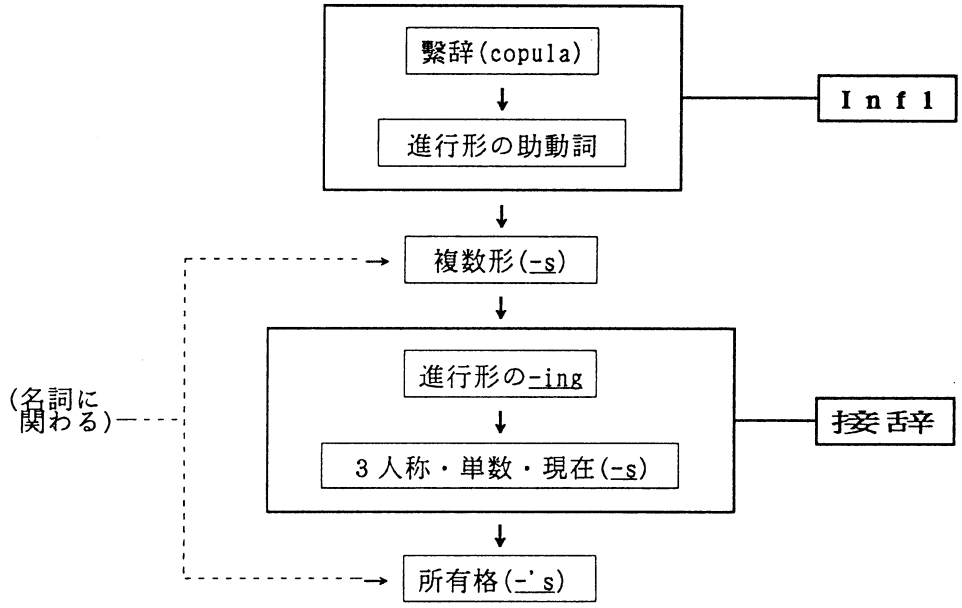
次に、複数形があるが、これは名詞に関わるものであり、最後の所有格（これも名詞に関わる）と共に、他の「動詞的」要素とは一応別系統と見るべきであろう。

複数形の次には、進行形の"-ing"と3人称・単数・現在の"-s"が続いているが、これらがいずれも動詞の**接辞**として生じる要素であることに注目すべきであろう。このことは、接辞移動の対象となる要素としての接辞がこの段階に集中して獲得される事を意味していると見ても差し支えないであろう。

最後の所有格は先に述べた通り、複数形と並んで、「名詞的」な要素であり、他とは区別される。

以上を、まとめると、次のようになる：

(6)　生成文法から捉え直したLightbown(1987)による習得順序



上に示した論者の解釈によれば、名詞に関わる要素（複数形、所有格）はひとまず置く事にして、動詞に関わる要素に話を絞るならば、「Inflの要素→接辞」という順序があるということになる（但し、「Inflの要素」というのは、基底レベルや、LFレベルの話ではなくて、表層的、顕在的にInflにあるということである）。ここで注目すべき事は、Lightbown(1987)によるこの順序付が、フランス語を母語とする学習者について調べた結果だという事である。既に上で見た通り、（Chomsky(1993)の時点での）定説では、フランス語の動詞は動詞句の主要部の位置からInflの位置に繰り上げられ、一方、英語の動詞は（BE動詞のような例外を除いて）表層で繰り上げられる代わりに、Inflにある接辞の方が

繰り下げられて動詞に接尾されるのであった。フランス語の母語話者が、英語としては例外的に母語・フランス語の動詞と文法的に振舞いの近いBE動詞系統の要素（繋辞や進行形の助動詞BE動詞）を早く習得するのは納得の行くことである。そして、接辞の下向きの移動（進行形の"-ing"や3人称・単数・現在の"-s"の場合に発生する）のような、フランス語において（少なくとも表層的には）観察されないケースを学習するに際して、より多くの時間を要したとしても、それは自然な事であろう（この点については、母語・フランス語からの影響の他、学習可能性ということも関わってくるが、これについては、本文の後で［補説］で言及する）。

尚、複数形の"-s"と所有格の"-'s"については不明な点も少なくないが、これは繰り返し述べるとおり、「名詞的」要素であり、その他の「動詞的」要素とは異なるメカニズムが作用する可能性が高い。そこで、統語論的には上の(6)を次のように名詞的要素と動詞的要素とを分割するのが良いのではないかとも考えられる：

(7)生成文法から見た習得順序：

N. 名詞的	V. 動詞的	
	V.1. Inflの要素の習得 V.1.1. 繋辞(copula) V.1.2. 進行形の助動詞	← 進
N.1. 複数形(-s)		行
	V.2. 接辞の習得 V.2.1. 進行形の-ing V.2.2. 3人称・単数・現在(-s)	← 形
N.2. 所有格(-'s)		

名詞的要素の方は、判断の材料も少なく、詳細は不明だが、ともかく「複数形→所有格」という順序がある。動詞的要素の方は、「Infl→接辞」という方向がある。Inflと接辞の両者は、「V.1.2.**進行形**の助動詞 → V.2.2.**進行形**の接辞(-ing)」という「進行形の習得」の段階によって仲立ちされる形になっている。

4. 結び

このように、第2言語としての英語の形態素習得順序については、生成文法の観点から見た場合、Krashen(1977)による標準的順序よりもLightbown(1987)による順序付けの方が、より自然であるように見える。これは一つには、Lightbown(1987)の調査が、対象となる学

習者をフランス語話者に限定した事によるのではないかと思われる。Lightbown(1987)の調査結果は、フランス語・英語間の「動詞移動 vs. 接辞移動」といった類型論的相違、あるいは、媒介変項における差異(parametric difference)によって適切に解釈されるのであった。従って、フランス語話者による英語の習得にはフランス語文法からの干渉(interference)の可能性を検討すべきなのではないかと思われる。第2言語習得の分野では、中間言語(interlanguage)という考え方を用いるようであるが、学習者の母語の影響を考慮することもやはり重要であろう（学習可能性からの見解については［補説］を参照されたい）。

最後に、Krashen(1977)における習得順序については、本稿では、十分論じられなかったが、これについても今後引き続いて考察して行くことが重要であると思われる。また、本稿の議論は、接辞移動・動詞移動に関わる事柄に集中し過ぎた面があるかもしれない。複数形や所有格などの名詞的要素についても、これから考えて行く必要があろう。

［補　説］

Infl にあるBE動詞の習得が先で接辞の習得が遅いということは、本文で論じたように学習者の母語・フランス語からの干渉として捉えられるに留まらず、これは、学習可能性(learnability)の観点からも説明がつくと本稿では考えている。

最近のminimalistの枠組みでは、lexicalistの立場から、接辞移動を仮定せず、lexiconの段階で既に屈折させておくようになっている[6)]。従って、問題は、動詞のInfl位置への繰上げが顕在的になされる（フランス語）か、それともLF移動でなされる（英語）かという違いになってくる。これが、Inflにおける動詞の素性照合のレベルに関する媒介変項的相違であることは言うまでもない。ここで、学習に際して肯定証拠(positive evidence)のみが有効に使用される場合、しばしば指摘されているとおり、媒介変項の初期値は最も厳しい形に設定されていなくてはならないはずである。従って、Inflでの動詞の素性照合のレベルに関する媒介変項は、理論的初期値としては、「LFとPFの両方において」となろう（ちなみに、フランス語はこの初期設定のままである）。これに対し、英語の定形動詞などの接辞付き動詞は顕在的にはInflには繰り上げられていないのであるから、問題の媒介変項の値は「LFにおいてのみ」という形になっているはずだと考えられよう。つまり、英語の実例（例えば、上の(2)の例文"They always go to Italy for their holidays."など）を証拠として与えられることにより、学習者は初期値たる「LFとPFの両方において」の中の「PFで」という部分を放棄するのである。（従来の言い方になるが）接辞移動の習得には、「PFで」を放棄するための相当の「インプット」を要することになるのであり、このことから、理論的にも、「動詞＋接辞」が文法の初期状態からもう１ステップ次の段階で出て来ることが予測されるのである[7)]。

注

＊ 本稿をまとめるに当たってお世話になった多くの方々に感謝を申し上げる。

(1)Krashen(1977)が言うような形態素の習得順序は、本来教授上意図的に提案された順序ではないものの、そのような習得順序が存在するという特質を、文法の教科書の編集に際して考慮すべきであるということは主張し得るかも知れない。この問題についての議論は、大場(1989)、牧野・山田(1994)などを参照されたい。

(2)具体的には、伊藤(1994)においては属格標識「の」の出現と主格標識「が」の出現の間の相関、及び、2語文を越えた発話と「の」の出現の相関等が論じられている。

(3)無論、これは多少話を単純化しているのであって、実際には、様々なパターンがある。そのような点については、例えば、朝倉(1955:p.40-41)などを参照されたい。

(4)接辞移動の考え方は生成文法の初期に遡るが、本文に紹介した動詞移動と接辞移動に関する80年代後半以降の主要な研究としては、Pollock(1989)がある。Chomsky(1989/1991)は、これを発展させている。更に、金子(1994)などによると、minimalistの枠組み(Chomsky(1993))では、lexicalistの立場に立って、接辞移動は仮定しないとされている。

(5)生成文法による、進行形も含めた動詞の形態法の扱いについては、Freidin(1992:ch.4)などを参照。

(6)上の注(4)同様、金子(1994)などを参照。また、基本的にはGBによる分析であるが、近松(1994)の3.1.節においても、このような考え方にかなり近い見解が述べられている。

(7)［補説］における学習可能性に関する議論が、立脚する「否定証拠の欠如」等の一連の考え方は、生成文法の文献にしばしば言及されているものであるが、大津(1990)等を参照されたい。

参考文献

朝倉季雄(1955):『フランス文法事典』, 東京, 白水社.
近松明彦(1994):「英語及び普遍文法における関係節の研究」, ms.

Chomsky, Noam(1981): Lectures on government and binding: The Pisa Lectures, Dordrecht, Foris Publications.

Chomsky, Noam(1989/1991): "Some notes on economy of derivation and representation," MIT Working Papers in Linguistics, 10, 43-74. and also in : R.Freidin(ed.)(1991): Principles and parameters in comparative grammar, Cambridge, Massachusetts, MIT Press.

Chomsky, Noam(1993): "A minimalist program for linguistc theory," In K.Hale and S.J.Keyser(eds), The view from Building 20: Essays in linguistics in honor of Sylvain Bromberger, 1-52. Cambridge, Massachusetts, MIT Press.

Freidin(1992): Foundations of generative syntax, Cambridge, Massachusetts, MIT Press.

伊藤友彦(1994): 「日本語獲得過程における格助詞(「が」、「の」の出現と機能範疇(I、D)の発現」, 第19回 関西言語学会, シンポジウムにおける発表.

金子義明(1994): 「Form Chainの背景と主要部移動について」, 日本英語学会第12回大会シンポジウム「Form ChainとChain Formation」における発表.

Krashen, Stephen D. (1977): "Some issues relating to the monitor model," In H. Brown, C.Yorio, and R.Crymes(eds.)(1977): On TESOL '77: Teaching and learning English as a second language: Trends in Research and Practice, Washington, D.C.: TESOL.

Lightbown(1987): "Classroom Language as Input to Second Language Acquisition": In C.W. Pfaff(ed.), First and Second Language Acquisition Process, Newbury House.

牧野高吉・山田尚美(1994): 「中学校検定英語教科書における文法形態素の導入順序」, 『英語教育』, 10月号(Vol.43, No.8).

大場浩正(1989): 「中学校英語教科書に見られる文法形態素の配列順序」, 『現代英語教育』, 5月号.

大津由紀雄(1990): 「文法獲得関数の性質について」, 日本認知科学会編『認知科学の発展』, Vol.2, 109-136, 東京, 講談社.

大津由紀雄(1994): "Theory of grammar and theory of grammar acquisition," 第19回関西言語学会, シンポジウムにおける発表.

Pollock, Jean-Yves(1989): "Verb movement, universal grammar, and the structure of IP," Linguistic Inquiry, Vol. 20, No. 3, 365-424.

鈴木信太郎、中平解、他(eds.)(1987): 『新スタンダード仏和辞典』, 東京, 大修館.

Longman Dictionary of Contemporary English(New Edition), Essex, Longman, 1987.